

## 多発性嚢胞腎における腎動脈・肝動脈塞栓療法(TAE)の有用性と今後の展望

### はじめに

今回の企画は厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 進行性腎障害多発性嚢胞腎分科会の仕事の一環として、嚢胞腎における腎・肝に対する TAE 療法の普及ならびにコンセンサスの形成を目的に行われた。TAE により患者さんの QOL を拡大し、また、今後多発性嚢胞腎の治療ガイドラインに含まれるように標準化、客観化を図りたいという趣旨である。多発性嚢胞腎の巨大腎・肝嚢胞は著しい腹部膨満をきたし、嚢胞感染のリスクを増やすのみならず、食欲低下の原因ともなり、ボディイメージの変化など QOL にも大きく影響する。嚢胞を小さくする薬物治療で現在本邦で保険収載された治療法はなく、摘出術などの外科的治療の合併症は少なくない。本邦では以前より腎・肝ともに TAE が行われ、徐々に TAE を施行する施設および患者数は増えてきている。しかし、その対象、手技や方法、塞栓物質、合併症の管理など統一されたコンセンサスは得られておらず、各施設で経験的に行われているのが実情である。そこで今回のシンポジウムを通して、問題点を共有し、特に腎臓専門医のみならずインターベンションの専門家である放射線科領域の先生方とも交流、情報交換することで医療レベルの均一化を図りたいと考えた。今まで複数の施設での経験をシンポジウムにて比べたことはなく、各先生方のご発表と討論によって、今後の本邦での TAE について非常に有意義なシンポジウムとなった。

今後、さらに当分科会のワーキンググループを中心に検討を進め、標準化した有用性の高い治療法として、一人でも多くの多発性嚢胞腎患者さんの症状の改善に寄与することを目標に TAE を確立していきたい。

帝京大学泌尿器科 堀江重郎